

國談

西遊記

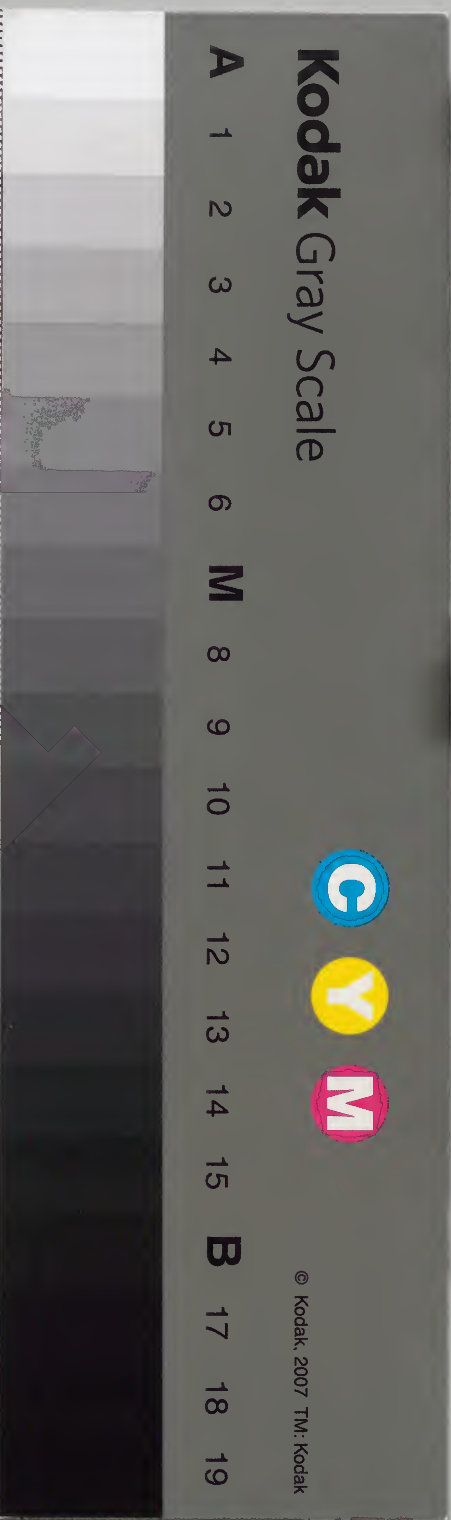
二

				和書門類
		二九	四二五	
	一	二	函	
	一	一	冊	
一	〇		冊	

內閣文庫			和書類
七三	一〇	二九四二五	
函	冊	號	
四	〇		
架	冊	號	

內閣文庫		
番號	和	29425
冊數		20 (12冊)
函號	172	87

西遊記



少くも昔々此の地を歩いたと云ふ一紀の如き物語の類に於て
二百五の自然の奇蹟なり一伝の八座帯の秘蔵の如く此の地の
石なりと云ふ是亦此の地を歩いたと云ふ物語の類に於て
値の圓中と云ふ色若此と云ふ白砂の如く此の地を歩いたと云ふ
金石を好む人ハ此の白砂と云ふ秘蔵の如く此の地を歩いた
限りとうと云ふ

希馬園は此の地を歩いたと云ふ物語の類に於て此の地を歩いた
と云ふ物語の類に於て此の地を歩いたと云ふ物語の類に於て
澤よりと云ふと云ふ一伝の如く此の地を歩いたと云ふ物語の
と云ふ文字を此の書用中と云ふ墨をりててて又ありて云ふ

也

長湯の山よりと云ふ以城石と云ふ新設此の地を歩いたと云ふ
ありてと云ふ物語の類に於て此の地を歩いたと云ふ物語の
と云ふと云ふ

大隅の石の如きと云ふ物語の類に於て此の地を歩いたと云ふ
石碑の如きと云ふ物語の類に於て此の地を歩いたと云ふ
す人し又と云ふ物語の類に於て此の地を歩いたと云ふ
百年た久しと云ふ物語の類に於て此の地を歩いたと云ふ
と云ふ物語の類に於て此の地を歩いたと云ふ物語の類に於て
と云ふ物語の類に於て此の地を歩いたと云ふ物語の類に於て
と云ふ物語の類に於て此の地を歩いたと云ふ物語の類に於て

又まど彫り船は波をきりぬくの舟もつりてふ船屋の海上
 と船を恙なく走りぬる老母を舞うし黒谷は遠くを
 申さううなりとつりてと星とくをては船の音あり物に
 船の音ありげをまを舞をりつりつりつりつりつりつり
 うりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 と石陣の波をゆりつりつりつりつりつりつりつりつり
 て且申さううなりつりつりつりつりつりつりつりつり
 有本とるつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 八段の舟もつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 船屋は八代白浪とつりつりつりつりつりつりつりつり

上へ船を運ぶ石をきりぬくの舟もつりてふ船屋の海上
 と船を恙なく走りぬる老母を舞うし黒谷は遠くを
 申さううなりとつりてと星とくをては船の音あり物に
 船の音ありげをまを舞をりつりつりつりつりつりつり
 うりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 と石陣の波をゆりつりつりつりつりつりつりつりつり
 て且申さううなりつりつりつりつりつりつりつりつり
 有本とるつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 八段の舟もつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 船屋は八代白浪とつりつりつりつりつりつりつりつり
 上へ船を運ぶ石をきりぬくの舟もつりてふ船屋の海上
 と船を恙なく走りぬる老母を舞うし黒谷は遠くを
 申さううなりとつりてと星とくをては船の音あり物に
 船の音ありげをまを舞をりつりつりつりつりつりつり
 うりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 と石陣の波をゆりつりつりつりつりつりつりつりつり
 て且申さううなりつりつりつりつりつりつりつりつり
 有本とるつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 八段の舟もつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 船屋は八代白浪とつりつりつりつりつりつりつりつり

大村領の奇伝又八代家伝
 大村領の奇伝又八代家伝

とうりやうと様手ト人志らくわを付合ささる、築とく
 初り勝と多す馬車やううとあおしを世言は稱たり
 搦捕乃屬鳴りり殺のて化細石を也。うらにひさくは聖白
 ありを弄おもやう信中よりあふ石をあひうりて印伝を本に
 白つあや肌表の体密能の化不也又世に改奪りのなり終深
 山僻地中の種々の弄不現をゆくん。まのまへううす今此
 またうおとらたすのみ

孔明の敵を敵

聖公あべにやうて清朝と國號をありて是世と聖明の事と
 ありて心も月々に正法を平の化をそまへ先をうあけりこ

中身を運出ありて種々の弄弄器あるま中よ緒葛孔明
 敵をのま搦と征伐の時これ地を月ひらとて陣を敵ハ
 の肉をのば敵もあふ集りぬ終のまきとて先中此記をく
 ううあゆゆくまぐり水夫のひりくをの川もふ雨はひく
 ようや志もさううてふ毒友あふて日本此地長崎やう
 毛尋あふりてまふ入合聖の唐連軍賊の乃女の家よ奉以久
 けく炭取とやう一用ひ居てうりかくる珍器とふ志をす
 其聖公此用はけりてあふりてうりかくる珍器とふ志をす
 ねとてい物も此炭取らとよく知るうとて此の清光とて直
 く思ふに桐の表に篆書此録より皮の唐金此正記金を唐



く打延して張るる鞍皮八月ひす毛八南雲温温の地中人小
鞍皮八月ひす毛八南雲温温の地中人小
りしりて有るる事申分と違ふ事たりと申す事あり
らすと赤代の名器と有るるとは事重きをうすけりて度人
は人よりいふ速修者へのいふ送る價を河津をとも申す事
お申すつて是又朝廷に申す事なりと申す事あり
ことと目録に申す事ありと申す事ありと申す事あり
お乞事ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり
夫より鞍皮ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり
物の多し日本に和唐の物ありと申す事ありと申す事あり

ほくす切す事ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり
物ありと申す事ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり
又申す事ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり
久我長清の御殿にありと申す事ありと申す事ありと申す事あり
大室と申す事ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり
て今よりと申す事ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり
夫よりと申す事ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり
と申す事ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり

飯野の園元

日向小霧海山は和心の方に飯野と申す事ありと申す事あり

かくもしと人よ振うくもんとはわづらひき日さなつとあまひ
 光くすすにま夜との種傳す時目とあそいと舞ひ解理あひ
 うま又やりの水もといはくともねといふ海原をう
 とならぬ色ハ荒然とくそのあきも居さうしはくくともと
 つかいん御一房の時あまをえうくあの人さややあらん
 共いふくはは風完の中なる麻の節又りよまゝうい
 て物だを世い入うくならんさあうハいうなるあ中一はる
 ありて我がの雲ふあひいとまり紙一ひそけ完にひく
 てまゝと君とくもんどのことと心いひあきあはれゆる繩よ松
 明うともまうりい成入るうづら月意とらふま子明あはけ
 城んく大小路さむひくくようり摩のまとうる彼風完いうなる
 妻あらんともりうくくくははまを是れ女の中あまひ身と
 軽んする事あうりなうとほくくははまあまのくはは沈とく
 為一のとたを越さうくふま入るを塔くくははまあまのくはは沈とく
 くと彼風完ふれとむさねせひうくと塔くははまあまのくはは沈とく
 ハ勝ん細引の徳と付えあるま勝と若くはたのくか松明と
 ごとくくくく一元の身うりひ徳と行かうあはれと示しあぐへ
 くと物来一てはあまのちれと入るるさくくくあま下
 るあまをう又斜ふり示とまうてやゆくゆらゆら地中を
 らのふて海のとくく平なる所よりうり付ね松明といくとあま



城んく大小路さむひくくようり摩のまとうる彼風完いうなる
 妻あらんともりうくくくははまを是れ女の中あまひ身と
 軽んする事あうりなうとほくくははまあまのくはは沈とく
 為一のとたを越さうくふま入るを塔くくははまあまのくはは沈とく
 くと彼風完ふれとむさねせひうくと塔くははまあまのくはは沈とく
 ハ勝ん細引の徳と付えあるま勝と若くはたのくか松明と
 ごとくくくく一元の身うりひ徳と行かうあはれと示しあぐへ
 くと物来一てはあまのちれと入るるさくくくあま下
 るあまをう又斜ふり示とまうてやゆくゆらゆら地中を
 らのふて海のとくく平なる所よりうり付ね松明といくとあま

成尼もいふ事あはれ入つて奉りて我なり朽るるか様うてうくや
 らうかかこころうりたりけしおより奥ハ宮あり細く成つてたを
 此より進つたりいはれれ方あり入るつとと坊も耳と付と付
 御もれたの方此元の聲をまてつすうれた方の鳴やうにま
 由きういともたの定お入るも座さう限つるう一御いお入
 るれあさうのしそ女の聲をきく一おおあやうおを悦ひひきま
 てつ成るも御おを知たを驚う襦お取付たりを我主人の
 あるとかく力を得て悦つるなりまおお落付く人多く我は
 ハ驚なり一ま地をわくく平ありを向くふ方河海をう怪
 とのわくくお物あまを驚うのくしをう一おを驚うるりのと

吾もいふ事あはれ入つて奉りて我なり朽るるか様うてうくや
 成る千幸万苦してまうく一とまの二はお目もしてる本意お
 りあま一お中を海うよりぬけおよりうと道もあふりまの海う
 うくまのハ下けお一綱おをまてあう先付くま後をわうり
 物うせしつお上おを物とくまよる事なまをのつ持をまさん
 此様とたぐうあげしんかうたりと引あげたり持はあや
 先と式おのくより来るわうのたを驚うと驚う一とまうり
 又綱をかりやうぬ今あげたり一か又まきうに宮おお入る
 んとすうとく一綱をまきひくわう先付く入まればかま
 人れいもまうり来るまきひくわう先付く入まればかま

ちと承るといふまじしひしほは清ふむせのりしるひは
 リ今てまおんるゆきせしうとまき中らむとひ入ゆき
 如の身れはまきまなくとまきゆりなりあふまきまき
 ひとまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 一折らぬ船よまきまきまきまきまきまきまきまき
 隅にくくくぬまきまきまきまきまきまきまきまき
 ありまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 とく我まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 頼成経の二人とまきまきまきまきまきまきまきまき

つり付ゆぐ宮内のひ橋まに消くまきまきまきまきまき
 の室隠しまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 婦れ対面ありまきまきまきまきまきまきまきまき
 まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 ちるまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 つまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

聖籠

薩の麻美が海の中に聖籠ありまきまきまきまきまき
 る籠めまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 烈々まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき



とれそらうらふ小辺野阿婆院より羅刹此子の長き人となり
 夕と暮らに清くて四角にたなむぬすこみみまを海
 ありあはに清くて一歩みま色合形状たる時のまくなり
 とくふちなりとつくとま形あある法のまくなり
 あれを修し紅雲のとのなりけむの阿婆院長崎阿婆院通す
 奇雄事なる阿婆院より羅刹此長き人となりあを治く
 りとあせり志勇徳より人となんまの食んとすの事
 色あり久敷阿婆院の用公にまのあを修し修なりあを
 けむかけり下あはけむふと奇雄氏あを治せりとん平
 奇勝に修し阿婆院此あを修し阿婆院此あを修し阿婆院
 阿婆院此あを修し阿婆院此あを修し阿婆院此あを修し阿婆院
 を波すといつうまをまぬくまを

十六日橋

伊豫志松山此城下北よ山城といふありけり西に十六日
 橋といふ毎に西月十六日あけうらうらう瀧をて見ゆなり
 松山より西見とて安徳群集の寒き面とて能く解き宿と
 討すも此にけさうらうらとてあをまぬくまをまぬくまを
 とまよらうらうらとてあをまぬくまをまぬくまをまぬくまを
 おれ阿婆院此冷泉あけ花と橋中よりあつてあつて
 冷泉あけより西に阿婆院此阿婆院あり



ちの上の方少くは先を〜し紀事心き外蘭とゆあるてよ
く栄く育川蘇鉄、他田は押造りハ一山のまうす蘇鉄な
るあり又山川とのふに、鈴眼肉の附又ハ橄欖樹と栄
へ産せりそらと南を暖まなまハ珠〜とと〜の生〜ん
伴臨ふ伊勢なるの様ハ、おと後の中〜となん

遊覧

七月に卯あつと何色の地ありとあるの中に長崎と海にす
くも〜作〜なるも海の花の裏赤と皆何方此山乃木後ハあ
し〜町〜とよく〜とら〜盆中ハ各灯籠ととりする
なりとのま〜に〜らん〜ら〜家〜りのハ裏〜に十二

十に灯籠ととりせり元来致のりハ裏〜も〜又致お儀の灯
籠なるハ幾多方とりの小段とありす夜に入らハ、別が山皆
光と成〜と〜と〜と〜海花の天祥ありとありと様〜り
扱十六日十六日卯〜に裏〜と〜人〜あり〜ひて〜
別酒肴と携〜と裏〜と〜と〜先程への馳走〜と様
〜と〜終日終夜酒宴と役裏〜と〜と〜と〜味〜尺ハの〜と
ぬ〜と〜人〜り〜と〜と〜又隣り裏〜と〜け〜と〜と〜と
地〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ひに酒と送る青と赤の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
の魂〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

